

番組

<舞囃子>

養 老	シテ	金春 嘉織
邯 鄲	シテ	高橋 忍
	笛	赤井 啓三
	小鼓	荒木 建作
	大鼓	辻 雅之
	太鼓	上田 慎也

<狂 言>

文山立	シテ	善竹 隆司
	アド	善竹 隆平

< 能 >

葵 上	シテ	金春 穂高
	ツレ	金春 飛翔
	ワキ	福王 知登
	ワキツレ	喜多 雅人
	間	善竹彌五郎
	笛	赤井 要佑
	小鼓	荒木 建作
	大鼓	辻 芳昭
	太鼓	上田 悟

附祝言

養 老 (ようろう)

美濃の国の養老の滝の付近に薬の水がわき出たというので、それを確かめるために勅使（ワキ）が遣わされる。勅使は滝のほとりで、老人（シテ）と若者（ツレ）に逢う。若者は毎日山で薪を取って父母を養っていたが、山道で疲れを覚えたある日、ふと泉の水を飲んだところ、まるで仙界の薬の水のように気分が爽快になった。汲んで帰り父母に飲ませると、老人も心が勇み、若々しくなった。そこでこの水を養老の水と名づけた。そう語って、老人と若者は勅使を滝に案内し、泉の水を帝に捧げて立ち去る。勅使が感激して帰京しようとする、天から花が降り、美しい音楽が聞こえる（中入）。土地の男（アイ）が滝のいわれを語り舞うと、やがて養老の山神（後シテ）が現れ、颯爽と舞を舞い、平和な御代を祝福する。

「高砂」等と同じく協能物。舞囃子では後シテの神舞を中心に御代と祝福する颯爽とした舞を紋服にて舞う。

邯 鄲 (かんたん)

蜀の国の青年盧生（シテ）は、人生について善知識の教えを受けようと楚国の羊飛山へ行く途中、邯鄲の里に泊まる。宿の女主人（アイ）の貸してくれた「邯鄲の枕」で眠りにつくと、勅使（ワキ）の迎えが来て、帝位につくことになる。即位して五十年たち、延臣（ワキツレ）は仙境の酒を勧め、舞童（子方）は舞い、栄華を極めるが、目ざめてみると、それは粟を炊く短い間の夢であった。この世は夢の世であるとの悟りを得た盧生は、身の一大事を尋ねようとの望みが叶えられ、故郷へ帰る。

栄華を極めた夢の中の舞、楽を中心に目の前のすべてのものが消えて夢が覚めてゆく有様を紋服にて舞う。

葵 上 (あおいのうえ)

光源氏の正妻葵の上は、物の怪に憑かれて病床にある。梓巫女（ツレ）に占わせると、物の怪は六条の御息所の生霊（シテ）であった。葵の上との車争いで恥辱をうけた御息所は、生霊となって葵の上に憑き（うわなり）後妻打ちの挙に出て、連れ去ろうとする（中入）。葵の上があまりに重態なので、横川の小型（ワキ）が呼ばれ、小型は祈る。悪鬼と化した御息所（後シテ）は抵抗するが、祈り伏せられ、ついには成仏する。原作は近江猿楽の能で世阿弥改作か（『申楽談儀』『五音』）。

前シテでは、起伏に富んだ複雑な筋回しで、心情を吐露するシテの謡が聞き所。有名な枕ノ段では着ていた唐織をぬぎ、葵上に襲いかかる場面は息をのむシーンが続きます。